

エミリー・ディキンソンの詩における喪失感

松 本 明 美*

A Sense of Loss in Emily Dickinson's Poetry

Akemi Matsumoto

要約：本論文の目的は、エミリー・ディキンソンの詩に見られる喪失感について考察することである。ディキンソンの生涯については謎が多く、いまだにベールに覆われた部分も少なくない。しかしこの詩人の書いた詩や書簡からは、「喪失」(“loss”)という言葉がよく見受けられる。しかし何を失ったかについては、詩によって曖昧で解釈が難しい。また、「喪失」をテーマにした詩のスタイルとして特徴的なことは、選り抜いた言葉だけを用いた、圧縮されたスタイルであるという点である。つまり、読者側には、少ない単語や語句をとおしていかに行間を読み取るかが1つの鍵になると言えよう。そこで本論では、ディキンソンの「喪失」感に関係する詩を選び、丁寧に読み解く作業を進めながら、彼女の「喪失」感の本質について論証していく。

Abstract： This paper aims to examine Emily Dickinson's sense of loss, which appears in a number of her works. Dickinson's life, as a poet, is still wrapped in a veil of mystery and hidden from us. However, we can find the word “loss” in her poems and letters, which is a significant key to elucidating her entire life. It is difficult to understand her definition of “loss” because some of her poems that include this word convey ambiguous expressions or meanings. Similarly, such poems have a relatively compact style in which Dickinson employs carefully selected poetic words. Namely, readers must understand what is expressed “between the lines” in succinct words or phrases. This paper will focus on Dickinson's poems that deal with the theme of “loss,” offer a close reading of them, and then demonstrate the essence of her sense of “loss.”

Key words： loss 喪失 persona ペルソナ (詩の語り手) poet 詩人

序 論

19 世紀アメリカの詩人、エミリー・ディキンソン (1830-1886) の生涯については、いまだ謎の部分が多い。その謎めいた生涯を解明する手がかりとなるのが、彼女が書き残した 1800 編近くの詩と、彼女の家族や親しい友人に宛てた膨大な数の手紙である。ディキンソンは 10

代の頃は才気煥発な少女だったが、次第に白い服を着て屋敷に隠棲するようになる。そのような特異とも言える生活の中で、家族と家族以外のごくわずかな知り合いとの文通によって、世の中の出来事を知ることができた。またディキンソンは、自分の書簡の中に自作の詩を書いて送ることもあった。このように、家族だけでなく、手紙をやり取りする友人たちの存在は、彼

*関西福祉科学大学 健康福祉学部 准教授

女自身にとって特別なものであったことは想像に難くない。しかしながら、人は誰しも人生の中で出会いと別れを経験する。特に、身近な人たちとの愛別離苦は、人生の中で最も辛い出来事の 1 つだろう。

話をディキンソンに戻せば、彼女もまた様々な人たちとの別離や死別を経験している。その苦悩や哀惜の念は、書簡の中でせつせつと記されている。そしてさらにその経験が、詩という芸術へと昇華されているのが分かる。それを象徴するのが、詩の中で度々目にする“loss”という言葉である。それは「喪失」という意味を持つだけでなく、様々な意味が内在されていることが分かってくる。本論文では、「喪失」という言葉をキーワードにしながら、詩人としてどのような成長を遂げたのかを論証していくことにする。

I 喪失感との葛藤

ディキンソンは、弁護士だった父の元で、暮らしぶりに困らない恵まれた家庭で育った。良家の子女として家事に勤しみ、その合間を縫って読書と詩作に埋没していた。ディキンソンは教会へも行かずほとんど遠出もしなかったため、「序論」で述べたように、世間との交流が激減して孤独感を深めることになった。その孤独感を掻き消すかのように、心を許せる友人や、トマス・ウェントワース・ヒギンソンやヘレン・ハント・ジャクソンなどの知己に書簡や詩を書き送った。孤独感と詩人としての自己確立との間の心の揺れを、詩を書くことによって、冷静さを保っていたと考えられる。まずこの章では、ディキンソンが若い頃から「喪失」感に苛まれていたことを確認し、そしてその複雑な心境を辿っていくことにする。

初めに考察する 209 番の詩は、ディキンソンが比較的若い頃に書かれたものである。

I lost a World—the other day!
Has Anybody found?

You'll know it by the Row of Stars
Around it's forehead bound!

A Rich man—might not notice it—
Yet—to my frugal Eye,
Of more Esteem than Ducats—
Oh find it—Sir—for me! (Fr 209)¹⁾

詩の語り手であるペルソナの「私」は、単刀直入に「先日、世界を失くした」と語り始めている。その「世界」とは、「星の列」が付いているため、発見はしやすいという。

第 2 スタンザでは、皮肉めいた調子でペルソナは語っている。「お金持ちの人」ならその「世界」に気付かないという。逆に「私の質素な目」にとって、「世界」は「金」以上のものだという。この“frugal”には、生活が「つましい」や「儉約する」²⁾という意味が含まれる。よって、「質素な目」を持つペルソナには、「世界」は「金」以上に価値を持つ。だからこそ「世界」を失くしたペルソナは、自分のために「それを見つけてください」と懇願するのである。ペルソナの「世界」は煌びやかで豪華絢爛たるものではなく、むしろ「質素」で居心地の良い場所だと考えられる。しかも黄金で眩しい「世界」の中にいると、目には刺激が強すぎて冷静ではいられないのである。³⁾逆に言えば、ペルソナの理想の「世界」とは、「金」以上に価値のある希少なものであることが分かる。

次の 39 番の詩にも、「喪失」感が漂っている。

I never lost as much but twice—
And that was in the sod.
Twice have I stood a beggar
Before the door of God!

Angels—twice descending
Reimbursed my store—
Burglar! Banker—Father!

I am poor once more! (Fr 39)

ペルソナの「私」は何かを失い、動揺したような口調で語り始めている。しかし、何を失ったのかは明らかにしていない。ただ、「二度」も失ったという。そのため、ペルソナは「乞食」となって、「神のドアの前」に立ちすくむしかない。ところが第2スタンザでは、「天使たち」がその都度ペルソナの元に来てくれて、しかも「蓄え」を返済してくれたのである。一方、「強盗」と「銀行家」である「父」という「神」は、ペルソナに救いの手を差し伸べることはしない。そのため、より一層貧しい身分に戻るようになるのである。「神」という絶対的な権威を持つ存在の前で、「貧民」となったペルソナはなす術がない。しかも第1スタンザだけで「二度」という単語が2回出てきていることから、「乞食」としてやるせない気持ちで、「神のドアの前」に立ち尽くすペルソナを想像できる。

「質素な目」という表現からは、このペルソナは、ディキンソン自身が投影されているとみなすことは可能だろう。ディキンソンが若い頃に目の治療のため、一時期アマーストを離れていたことがあった。⁴⁾その影響もあって、「金」という眩しいものに対して目を向けることは、想像以上の苦痛を伴うものだったに違いない。

次の702番の詩でも、ペルソナは「喪失」感到に苦しめられていたことが察せられる。

Except the Heaven had come so near—
So seemed to choose My Door—
The Distance would not haunt me so—
I had not hoped—before—

But just to hear the Grace depart—
I never thought to see—
Afflicts me with a Double loss—
'Tis lost—And lost to me— (Fr 702)

この詩では、各スタンザの2行目と4行目が脚韻を踏む構造となっている。そしてペルソナの「私」は、自分の悲哀を切々とではあるが、終始冷静な口調で語っている。

初めの2行は複雑な言い回しである。「天国」がペルソナの居場所に接近し、「ドア」に辿り着けるぐらいの近さにあったため、ペルソナはその「距離」に戸惑いを覚えている。なぜなら「以前には、そのことを望まなかった」からである。

しかしながら、第2スタンザではさらなる苦しみを吐露している。「恩恵」(“Grace”)が「離れて」いくことを想定していなかったのである。そのため、「二重の喪失」(“a Double loss”)を経験することになる。つまりペルソナは、「恩恵」を失い、そして自分自身に対しては与えられることがないことを認識したからである。自分には与えられることはなく、何も見出すことができない絶望感である。その絶望感が、「二重の喪失」という表現の中に凝縮されている。またしてもペルソナは、「貧民」という自分の困難な状況を再認識せざるを得ないのである。

常に「喪失」感がつきまとうペルソナは、当てもなく歩き回ってしまう。

A loss of something ever felt I—
The first that I could recollect
Bereft I was—of what I knew not
Too young that any should suspect

A Mourner walked among the children
I notwithstanding went about
As one bemoaning a Dominion
Itself the only Prince cast out—

(Fr 1072, stanzas 1-2)

「いつも何かを失った気がしていた」と語るペルソナは、「失った」何かを思い出そうとしているが、記憶が定かではない。「何か」を喪失

した記憶だけが鮮明のようである。ペルソナでさえも、具体的なことは覚えていないので、詩の冒頭から謎に包まれたままである。ただ、ペルソナは歩きすぎたために、気付いてくれる人がいなかった、と述べられている。まるで「嘆いている者」が、「子どもたち」の間で泣いているような様子だと説明されている。一見、泣いている子どものようにしか見られないペルソナではあるが、それでもひたすら歩き続けるしかない。その様子はまるで、「たった 1 人の王子」が、「領土」を追われて悲嘆に暮れるかのようだ、と表現されている。

後半のスタンザでは、子ども時代から成長して、知徳を備えたペルソナが、現在の心境を次のように述べている。

Elder, Today, A session wiser,
And fainter, too, as Wiseness is
I find Myself still softly searching
For my Delinquent Palaces—

And a Suspicion, like a Finger
Touches my Forehead now and then
That I am looking oppositely
For the Site of the Kingdom of Heaven—
(Fr 1072, stanzas 3–4)

子どもの時より「年齢を重ねて」きたペルソナは、「1 学期分」だけ賢くなったと冷静に分析している。それは当時より幾分かは、思慮分別を備えてきたことを暗示している。それでもペルソナは、子どもの頃のように探し歩いているのである。しかも「そっと」(“softly”)という副詞を付加している。つまりペルソナは、誰にも気付かれないように探し続けているのである。しかしペルソナが見つめようとしているのは、「私の怠慢な宮殿」(“my Delinquent Palaces”)である。自分が居住していたはずの「宮殿」を探すという件は、どこか矛盾している。この「怠慢な」という単語には、「罪を犯

した」⁵⁾などの強い意味合いを含む。それゆえ、この「宮殿」が「王子」の所在すら確認せず、無責任で「怠慢な宮殿」であることが伺える。このためペルソナは、疑心暗鬼を生じている。「疑い」が常にペルソナの心に引っかかっている。ペルソナは「天国の場所を／反対に探している」のではないかと、危惧しているのである。自分を受け入れてくれる場所が見つからないのは、「反対に探している」からであることをペルソナは悟っている。これからは孤独と闘いながら、自分が安住できる場所を求めて歩き続けなければならないと、自覚しているのだろう。

これまでに、ディキンソンのペルソナが「喪失」感を語っている詩を取り上げながら、考察を続けてきた。それらの詩は、単に物質的な「喪失」を呈示しているというよりもむしろ、経済的な困窮 (Fr 39) であったり、「恩恵」(Fr 702) であったり、精神的なもの (Fr 209) であったり、自分が安住できる世界 (Fr 1072) であったりと、抽象的で複雑なものをペルソナが探し求めているケースが多かった。これらのケースは、ペルソナが孤独感を強く意識していることと、充足できない心を保持していることを示している。しかし、ペルソナはいつも自分自身の世界を見つけるまで、心の葛藤を繰り返しながらも、一途に前進するしか方法がないことを察知していた。

II 喪失感からの克服

精神的に充足できる世界を探し求めてきたペルソナにとって、心の支えとなったものは何であろうか。この章では、ペルソナが「喪失」感を絶えず感じつつも、雑念を払拭して泰然自若の境地に辿り着けるのかどうかを論述していく。

この章の最初の詩には、「美」と「悲しみ」と「喪失」が混在している。

Must be a Wo—

A loss or so—
To bend the eye
Best Beauty's way—

But—once aslant
It notes Delight
As difficult
As Stalactite—

A Common Bliss
Were had for less—
The price—is
Even as the Grace—

Our Lord—thought no
Extravagance
To pay—a Cross— (Fr 538)

538 番の詩は非常に圧縮されたスタイルで構成されている。冒頭で助動詞の“Must”を置くことによって、強い推測を示している。しかしながら、主語と助動詞以下の述部が倒置されているため、読者には意表を突く表現となっている。

第1スタンザから内容について考察を進めると、「最高の美に／目を向けること」は、「悲しみか／喪失」だという。ここでは何に対する「美」なのか明らかにされていないため、逆説的な技法が用いられていることが分かる。

第2スタンザでは、最小限の単語や直喩で表現されているものの、より一層難解な内容となっている。内容を整理すれば、「一度斜めに見る」と、「目」は「喜びに気付く」とあるが、それが「困難のような」あるいは「鍾乳石のような」ものに目を留めるといふ。「困難」なものと、石灰質の白みを帯びたようなものが、喜びに結び付けられるのかどうかについては、かなりの熟慮を必要とする。ここでは撞着、すなわち矛盾した意味の単語を意図的に並置することによって、ペルソナは「目」が捉える「美」

が、いかに鮮烈かを効果的に表現しようとしているのである。

第3スタンザでは、「美」の価値観を高めていることへの説明がなされている。通常の「よくある至福」なら「より少ない額」で十分だという。「値段」については、「恩恵と同じぐらい」という抽象的で晦渋な説明となっている。“Grace”という言葉は、I章で考察した702番の詩の中にも見られた。その702番でも、「恩恵」が失われることへの恐怖感で語りが締めくくられていた。言い換えれば、「最高の美」は「恩恵」と同様に、お金には換えられない至上のものであることが分かる。逆に、お金で手に入れられるものなら、その「美」は本物ではないということだろう。

最後のスタンザでは、「我々の主は考えもなさなかった／十字架を支払うことが／贅沢なことだとは」という語りで終えている。この詩全体から分かることは、「最高の美」を手にするためには、キリスト教的な放棄、苦痛や「喪失」が必要であることだ。⁶⁾93 番の詩を例に挙げれば、「水は、喉の渇きによって教えられる」とあるように、「水」の本当の味を知るためには、喉がひどく渇くことによってその重要性や価値を知ることができる。それゆえ、「主が支払った値段は大変大きかった」⁷⁾し、「恩恵」に値するものである。優れた「恩恵」を手にするためには、放棄や諦めといった苦しみの代償を負うことによって得ることができる。ここで興味深いことに、「放棄は痛烈な美徳」で始まる詩 (Fr 782) をも想起させる内容となっている。

ディキンソンにとって「喪失」は、「発見」と表裏一体となる場合がある。次の910番の詩を引用する。

Finding is the first Act
The second, loss,
Third, Expedition for the “Golden Fleece”
Fourth, no Discovery—

Fifth, no Crew—

Finally, no Golden Fleece—

Jason, sham, too— (Fr 910)

この 910 番も無駄な言葉を省いた引き締まったスタイルとなっている。その中に、6 つの項目が列挙されている。まず「最初の行為」は、「発見すること」(“Finding”) だという。しかし、2 番目の行為は「喪失」となっていて、唐突な印象を与えている。これら 2 行について推察できることは、物事は所有すればすぐに「喪失」する可能性を覚悟するべきだという意味だろう。ここにはディキンソンらしい冷徹な見方が垣間見られる。3 つ目には、ギリシャ神話の「イアーソン」(“Jason”) が奪還したという「金の羊毛」⁸⁾のために「遠征」した話を取り上げられている。しかしながら、4 つ目の点では「発見されず」(“no Discovery”)、その次の 5 つ目の点では、「乗組員」もないという。そしてとうとう「最後には」、探し求めていた「金の羊毛」は発見されなかったとなっている。結局最終行では、「イアーソン」もまた「詐欺師」だと揶揄している。英雄の「イアーソン」に対するこの表現について、エバーウィンはこの詩が「冷笑的な姿勢」⁹⁾を暗示していると指摘している。この詩の中では、「発見すること」と「喪失」が正反対の意味を有していると同時に、それらが同等のものとしてリストに上がっている。ベルソナは「喪失」というネガティブなものを、2 番目に位置付けることで、誰にでも起こり得る人生の試練や絶望に焦点を当てていると言える。

次に引用する 499 番の詩も、「試練」を経験することの必要性や意義をテーマにしている。

Best Gains—must have the Losses’ test—

To constitute them—Gains. (Fr 499)

この 499 番の詩は 2 行だけで構成された、ごく短い詩である。そしてこの 499 番は、1863 年 2

月にディキンソンが、T. W. ヒギンソンに書き送った書簡の中に書き添えたものである。¹⁰⁾

詩の内容については、「最高の利益」を獲得するためには、「喪失の試練」を経験しなければならない。その「試練」に耐えなければ、本当の意味での「利益」の神髄が分からないだろう。その「試練」を積み重ねることで、「利益」は増幅されていく。「最高の利益」というものは、たやすく手に入るほど甘くはないのである。1 行目と 2 行目の両方に、“Gains” という単語を入れることにより、2 行目の言葉に、より一層の威厳が付与されたと考えることができる。

次の 1202 番の詩を読む。

Of so divine a Loss

We enter but the Gain,

Indemnity for Loneliness

That such a Bliss has been. (Fr 1202)

この短い 4 行詩もまた、スーザン・ギルバート・ディキンソン (エミリー・ディキンソンの兄嫁) に宛てた書簡の中に含まれている。¹¹⁾

この詩の“a Loss”は、「こんなにも神聖な喪失」と形容され、崇められている。しかしながら、「私たちは利益だけを申請する」とある。これは人々が「喪失」という苦い体験を避けてしまい、目先の「利益」だけに気持ちが集中してしまうことが述べられている。さらに“Indemnity”という単語の意味が「賠償、補償」であり、法律に関係する言葉¹²⁾でもある。「孤独」に対する「補償」は、「このような至福」だったのだと締めくくられている。「孤独」という本当の寂しさや孤立感を体験した人には、後で「至福」という「補償」が付いてくるものなのである。本物の「至福」を勝ち得るためには、「孤独」という困難を克服することが大切で、言わば悟りの境地に達した人のみが享受できる。だからこそ「喪失」は、「利益」の重みや貴重さを厳かに教えてくれるのである。またこ

の詩の内容について特筆すべき点は、ディキンソンは「喪失」という言葉に「神聖な」(“divine”) という形容詞を付与していることである。

ディキンソンが若い頃に書いた、「私は指に宝石を握りしめて／眠りについた」(Fr 261) で始まる詩では、ペルソナの「私」は以下のように回顧している。

I held a Jewel in my fingers—
And went to sleep—
The day was warm, and winds were prosy—
I said “’Twill keep” —

I woke—and chid my honest fingers,
The Gem was gone—
And now, an Amethyst remembrance
Is all I own— (Fr 261)

まるで少女のようなペルソナの「私」は「指に宝石を握りしめて／眠りについた」が、目覚めたときに「無くなっていた」ことに気付く。そこで「正直な指を叱った」のだが、それは寝ている間に無くなるかもしれないと予期した結果、まさに予想どおりになったので、「正直な」という言葉を使用したのだろう。「宝石」は紛失してしまったが、「今」では「紫水晶の思い出」(“an Amethyst remembrance”) だけが残っている。大事な「宝石」が、「今」では目には見えない「思い出」へと変容した。だが、その「思い出」は「紫水晶」のように紫色に煌めいて、心の中で消失することはない、とペルソナは語っている。この詩には大事なものを失うという怖さと同時に、生きている限り、物はなくなっても、心の中で「思い出」や印象は永久に残るという確信のようなものが読み取れる。そのことは「夢だけでもよい／もしミツバチがほとんどいないなら」(Fr 1779) という詩文にも表れている。たとえ何かを構成するもの、もしくは目に見えるものが消失してしまったとして

も、「夢」のように心の中に記憶されていることや思い描いていたものがあれば、芸術作品の中に再現することは可能だ、という意味である。詩を文学の1つの形態とみなせば、詩人は自分の目で見て、心に焼き付けたものと想像力を元に、完成された詩として後世に伝え続けることができる。つまり、詩人は洞察力と鋭敏な感受性、そして想像力を具えていれば、画家がキャンバスで表現するように、詩の中で表現できる才能を持っているのである。「思い出」や「夢」は詩人の頭の中で何度も蘇り、決して色褪せることはない。想像力と選び抜かれた言葉が混然一体となり、やがて読者に驚くべき影響力を及ぼすことになるだろう。

この章では、「喪失」という言葉の定義が複数の側面を持っているため、必ずしも負の側面ばかりを内包しているとは限らないことが分かってきた。「最高の利益」を獲得するためには、「喪失の試練」が必要であるように、「喪失」はその人に試練を与えて、精神を鍛錬する役目を担うものとも言える。だから人は、常に失ったものを探し続けながら、人生の旅路を歩いていくのだろう。逆説的にも、人は「発見」と「喪失」の真意を理解していれば、欲を出し過ぎて目先の「利益」に囚われた挙句に失敗するという事態を避けることができる。考察した499番と261番の詩は、「喪失」は新たな力を生み出す原動力になることを暗示している。「喪失」をただ恐れるだけでなく、むしろ心の豊かさの源になることを知っていれば、動揺することなく達観した心境を保つことができる。

結 論

I章とII章では、ディキンソンの「喪失」感をテーマにした詩を読み、考察を進めてきた。全体をとおして理解できたことは、ディキンソンの「喪失」をめぐる詩には、複雑な要素が重層的に内包されていた点である。

I章では、ペルソナが「喪失」に直面し、貧しくなって必死に救いを求めて歩き回っている

様子が見られた。そこでは、失うということ自体への恐怖や不安が、詩の中に渦巻いていた。時には「二重の喪失」に喘ぐペルソナの姿があった。「天国」の場所へ反対方向に進んでいるのではないかと疑念を持ちつつも、ペルソナは自分の信念を頼りに歩みを進めた。ディキンソンが若い頃に「喪失」についての詩を書いたり、書簡の中でも言及したりしていたことから分かるように、ディキンソン自身が孤独と「喪失」感を経験し、葛藤に苛まれていたと考えられる。

一方、Ⅱ章ではⅠ章の詩とは内容も解釈も異なり、中には「喪失」を肯定的に受け止めていた詩もあった。何かを得るための達成感や喜びを味わうためには、「喪失」の経験という痛みを甘受しなければならない。何かを失うことによって、新たな発見につながることもある。たとえ大事なものを失ってしまったとしても、記憶の中に永久にそれを留めることができる。それが大きな心の拠り所に繋がるのである。

Ⅰ章とⅡ章で詩を語ったペルソナには、ディキンソンの生涯の一端が投影されていると言って良いだろう。特に若い頃のディキンソンは信仰上の問題、詩人としての葛藤などで悩んでいたことが分かる。それでもペルソナが歩みを止めなかったように、ディキンソンも詩人としての自己を確立し、雑念を払拭して詩を書き続けた。「『無』は／世界を新しくする力」(Fr 1611) という 1 文が示すように、何もない「無」の状態から、詩人は記憶力と想像力を駆使して、1 編の詩を書き上げることができる。そして、それは詩人が亡くなった後も読者に読まれ続けていく。それゆえ、「喪失」はディキンソンにとって、心を鍛え、かつ刺激を与えることができる上でも、欠くことのできない「試練」なのである。

注

- 1) 本論文では、ディキンソンの詩の引用は 1998 年に出版されたフランクリンの 3 巻本により、Fr

209 と記す。

- R. W. Franklin, ed., *The Poems of Emily Dickinson, Variorum Edition*, 3 vols. (Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1998) 240.
- 2) 『ランダムハウス英和大辞典第 2 版』(東京: 小学館、2002 年) 1069 頁。
- 3) Richard B. Sewall, *The Life of Emily Dickinson* (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1974) 606, n 9.
- 4) Sewall 398.
- 5) 『ランダムハウス英和大辞典第 2 版』710 頁。
- 6) Beth Maclay Doriani, *Emily Dickinson, Daughter of Prophecy* (Amherst: U of Massachusetts P, 1996) 169.
- 7) Doriani 175.
- 8) ギリシャ神話の英雄。イアーソンによるコルキス遠征にて、黄金の羊の毛皮を獲得した。マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル、著、西田実、主幹『ギリシア・ローマ神話事典』(東京: 大修館書店、1988 年) 109-11 頁。
- 9) Jane Donahue Eberwein, *Dickinson: Strategies of Limitation* (Amherst: U of Massachusetts P, 1985) 66.
- 10) Thomas H. Johnson and Theodora Ward, eds., *The Letters of Emily Dickinson* (Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1958) 423.
- 11) *Letters*, 489.
- 12) 『ランダムハウス英和大辞典第 2 版』1361 頁。

Works Cited

- Anderson, Charles Roberts. *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise*. Westport: Greenwood P, 1960.
- Doriani, Beth Maclay. *Emily Dickinson, Daughter of Prophecy*. Amherst: U of Massachusetts P, 1996.
- Eberwein, Jane Donahue. *Dickinson: Strategies of Limitation*. Amherst: U of Massachusetts P, 1985.
- Eberwein, Jane Donahue, ed. *An Emily Dickinson's Encyclopedia*. Westport: Greenwood P, 1998.
- Ferlazzo, Paul J. *Emily Dickinson*. Boston: Twayne Publishers, 1976.
- Gordon, Lyndall. *Lives Like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds*. London: Virago, 2010.
- Juhasz, Suzanne. *The Undiscovered Continent: Emily*

- Dickinson and the Space of the Mind*. Bloomington : Indiana UP, 1983.
- McNeil, Helen. *Emily Dickinson*. London : Virago P., 1986.
- Sewall, Richard B. *The Life of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1974.
- Small, Judy Jo. *Positive as Sound : Emily Dickinson's Rhyme*. Athens : U of Georgia P, 1990.
- マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル、著。西田実、主幹。『ギリシア・ローマ神話事典』東京：大修館書店、1988年。
- 山川瑞明、武田雅子、編訳。『エミリー・ディキンソンの手紙』東京：鷹書房弓プレス、1984年。
- 『ランダムハウス英和大辞典第2版』東京：小学館、2002年。